

タイトル	アンジェロ・ソリマン：ウィーンのアフリカ人フリーメイソン
著者	北原，博；KITAHARA, Hiroshi
引用	北海学園大学学園論集(180)：85-95
発行日	2019-11-25

アンジェロ・ソリマン

—— ウィーンのアフリカ人フリーメイソン ——

北 原 博

アンジェロ・ソリマン (Angelo Soliman, ca. 1721-1796) の運命は衝撃的である。ハプスブルク君主国の貴族リヒテンシュタイン侯爵家の元侍従 (Kammerdiener) で世子の元教育係だったこの名望あるアフリカ人は、1796年に卒中の発作で死去すると、剥製にされ、帝室博物標本室に展示されたのである。本稿の関心はしかし彼の数奇な運命にあるのではない。ソリマンはただの貴族の従者ではなかった。ソリマンの最初の短い伝記を書いたカロリーネ・ピヒラー (Karoline Pichler, 1769-1843) は、啓蒙専制君主であった皇帝ヨーゼフ2世 (Joseph II., 在位 1765-90) が「アンジェロの運命に多大な関心を抱き、散歩の際に一度ならず彼の腕にしがみつくと、公然と彼を特別扱いした」¹と記述している。彼はまたウィーンの啓蒙主義のキーパーソンであるイグナツ・フォン・ボルン (Ignaz von Born, 1742-1791) やハンガリーの代表的文学者で、啓蒙的言語改革者でもあったカジンツィ・フェレンツ (Kazinczy Ferenc, 1759-1831) とも交流があった²。彼は啓蒙の時代に、君侯から知識人まで幅広い人脈を持った人物だったのである。

なるほどソリマン自身は著作をものにしていないわけでもないし、ボルンのようにフリーメイソン・ロッジの改革に指導力を発揮して、ウィーン啓蒙主義のネットワークのひとつの拠点を築き上げたわけでもない。ソリマンはその点ではウィーン啓蒙主義の脇役に過ぎない。しかし、その出自ゆえに、いわばウィーン社会の中での差異ゆえにウィーンの上流社会への同化に成功したソリマンは、啓蒙期ウィーンを眺める視点を少しずらしてくれる。本稿では日本ではあまり知られていないソリマンについて紹介するとともに、彼とフリーメイソンリーとのかかわりに主眼を置くことで、ヨーゼフ2世の単独統治期前半のフリーメイソンリー盛期を別の角度から眺めてみたい。

ソリマンの生涯³

ソリマンは1721年ごろアフリカで生まれた。出身地についてははっきりしないが、北東ナイジェリアのカヌリ族の出ではないかと推定されている⁴。7歳の時、彼の一族は敵対する部族の攻撃に遭い、ソリマンはその後、誘拐され、奴隷として売られてしまう。1730年ごろ彼はシチリアのメッシーナへと連れて行かれ、同地の侯爵夫人⁵に転売される。夫人のもとで彼は教育を受け、キリスト教の洗礼を受けて Angelo Soliman となる。以後、ソリマンはキリスト教入信の日9

月11日を誕生日にしたという⁶。

1734/35年ごろ、侯爵夫人は、ソリマンをシチリアに滞在していた帝国の陸軍元帥ロブコヴィッツ侯爵(Johann Georg Christian Fürst von Lobkowitz, 1686-1753)に譲り渡す。ピヒラーは夫人の打算を理由に挙げるが、ブロームは、ソリマンが思春期に達していて夫人の寝室の従僕をもはや務められないこと、メッシーナの将来が不確実なこと、スペインの厳しい奴隷政策などを考慮し、むしろソリマンの将来のためにロブコヴィッツ侯爵に委ねたのではないかと推測している⁷。

ロブコヴィッツの元でのソリマンの経歴についても実証資料に欠くため、リューディガー・ヴォルフも指摘するように、侯爵の経歴から推定するしかない⁸。軍人だったロブコヴィッツ侯爵は任地を転々とし1734年にシチリアからロンバルディアへ、39年トランシルヴァニア、42年にボヘミアの陸軍元帥となり、43-46年イタリア滞在、のちにハンガリーで軍務を終える。ソリマンは使用人として侯爵と共に各地を旅行し、主人の信頼を得、軍人としての階級はなかったものの戦場では侯爵の傍らで「勇敢な兵士にして経験ある士官」⁹として戦い、1度は主人の命を救ったという。

1753年、ロブコヴィッツ侯爵が死ぬと、遺言によりヨーゼフ・ヴェンツェル・フォン・リヒテンシュタイン侯爵(Joseph Wenzel Fürst von Liechtenstein, 1696-1772)に仕えることになる。1754年のリヒテンシュタイン家の帳簿に「侯爵の黒人」(Fürstl. Mohr)と記載され、100グルデンの俸給を得ていることから、この時点では間違いなく奴隷の身分ではなかった¹⁰。とはいえ、ソリマンは珍奇な存在として、侯爵の権勢を誇示するための道具に過ぎなかった。1760年には侍従(Kammerherr)になっており、60年のパルマ旅行、65年のフランクフルト旅行の間に君侯の「装飾的なオブジェクト」から「自覚的な使用人」へと成長しているという¹¹。なお、フランクフルトでは皇帝の戴冠式の折、賭トランプで2万グルデン勝ったという逸話が残っている¹²。

だが、ソリマンはリヒテンシュタイン侯爵によって解雇されてしまう。1768年ソリマンが侯爵に内緒で、大司教枢機卿の同意の元、マグダレーナ(Magdalena, geb. Kellermann, 1734-86)と結婚したことが発覚したためである。当時、召使、官吏、軍人などには結婚の許可が必要だったが、リヒテンシュタイン侯は財政上の理由で許可を出さなかった¹³。ソリマンはヴァイスゲルバーフォアシュタット(今日のウィーン3区)に購入していた自宅に転居し、家庭生活を享受するとともに、歴史研究に取り組み、教養ある人々と交際した。

1772年のリヒテンシュタイン侯爵の死はソリマンにとって転機となる。侯爵家を継いだフランツ・ヨーゼフ・フォン・リヒテンシュタイン侯爵(Franz Joseph Fürst von Liechtenstein, 1726-81)は翌年ソリマンを復権させ、世子の教育係にしたのである。ソリマンは1783年に引退して年金をもらうまで、再びリヒテンシュタイン家に奉公することになる。そして1796年にソリマンは卒中発作を起こして死去する。その遺体は剥製にされ、遺族の要望に反して、1806年まで帝室博物標本室に「想像上の衣装を着せられ、アメリカの(!)風景」を背景に展示される¹⁴。人間の剥製を製作し展示することの可否は度外視しても、そこにあるのは異国情緒を満足させる

だけの空想にすぎず、とても人種や風土、文化の多様性を正確に伝えようとする科学的態度は認められない。ソリマンの剥製は1806年によく収蔵庫に収められ、1848年に他の剥製にされた人々と共に焼失した。

フリーメイソンとしてのソリマン

ソリマンはフリーメイソンでもあった。記録が残っているところでは、1781年7月20日にウィーンのロッジ「真の調和」(Zur wahren Eintracht)に他ロッジからの訪問者として出席している¹⁵。つまり、ソリマンはこの時点でいずれかのロッジに所属していたわけだが、彼がいつどこのロッジに加入したのかは不明である。ソリマンはロッジ「真の調和」の創設メンバーのひとりフランツ・クサーヴァー・フォン・シュテグナーン男爵(Franz Xaver Freiherr von Stegnern, 1742-?)と懇意であり、その関係でこのロッジを訪れたのだろう¹⁶。およそ1か月後の8月17日には「真の調和」でソリマンの編入の可否が審査されている。ロッジのプロトコルには以下のように記載されている。

第4に兄弟アンジョロ・ソリマンをこのロッジのメンバーとして加入させるべきか、秘密投票に取り掛かり、これは素晴らしい結果に終わり、通常通りに祝意が述べられたあと、彼の境遇は恵まれていないので、彼を無料で加入させること、そしてまたひょっとしたら非正規のロッジに加入していたので矯正することが満場一致で決定された。¹⁷

秘密投票の結果が示すように、ソリマンはウィーンの社会でも認められていたのである。プロトコルの「ひょっとしたら非正規の」が示すように、ソリマンが以前入会したロッジはウィーンのメイソンたちが認知していないロッジだったのだろう。オーストリア管区ロッジ(Provinzialloge von Österreich)傘下のロッジではなかったものと思われる¹⁸。モリソンも指摘しているように、ソリマンは「真の調和」に加入する際に、心身ともに自由であることを宣誓し¹⁹、正規のメンバーとなっている。ひょっとしたら、ハンス・ヴァーグナーが可能性として指摘するように、以前の加入の段階では「自由人」という必要条件を満たしていなかったのかもしれない²⁰。ヴァーグナーはそれ以上言及していない。ソリマンが「奉仕する兄弟」(dienender Bruder)だった可能性も排除できないが、ソリマンが仕えていた3人の侯爵がフリーメイソンだったかどうかは確認されていない。

ソリマンは9月7日のロッジで「真の調和」に職人として編入され、さらに10月6日のロッジで親方に昇進した。ソリマンが加入したロッジ「真の調和」は、ロッジ「戴冠した希望」(Zur gekrönten Hoffnung)を母体に15人のメンバーで1781年3月12日に設立された新しいロッジであった。このロッジののちにイグナーツ・フォン・ボルンの加入により学術アカデミーの性格ももち、演習ロッジ(Übungsloge)で密儀研究についての講演を行って『フリーメイソンのため

のジャーナル』*Journal für Freymaurer* (1784-1786) 掲載論文として刊行したり、自然科学の論文誌『ウィーンにおける調和的な友人たちの自然研究』*Physikalische Arbeiten der Einträchtigen Freunde in Wien* (1783-1788) を刊行したりしている²¹。啓蒙主義的態度を有する同ロッジはウィーンで名声を博し、1785年末のロッジ統合までに200人を超えるメンバーが在籍することになる。創設メンバーの経歴を調べてみると、官吏が7名、軍人3名、医師2名、外交官、宮内官、実業家各1名となっており²²、半分近くが官吏であった。イルメンが分析した「真の調和」全メンバーの職業分野では、教育・文化が27%と最も多く、国家行政職は約24%となっており²³、5年弱の間に教育・文化関連のメンバーの比重が大幅に高まっている。なお、イルメンは年齢構成も分析しており、約5%の年齢不詳のメンバーを除き、1785年時点のメンバーの平均年齢はほぼ36歳で、29歳までが約26% (55人)、30～39歳が41% (87人)、40～49歳が24% (50人)、50～59歳が8% (17人)、60歳以上1% (3人) である²⁴。1785年にはソリマンは64歳ぐらいなので、ロッジの中では稀な年長者だった。

ロッジのプロトコルに記載された出席者記録によれば、ソリマンの出席率は40パーセント弱でロッジに定期的に通う熱心な会員だったことがわかる²⁵。出席記録以外でソリマンの名前に言及があるのは、編入や昇進、役職選出のほかに、慈善活動がある。困窮家庭のための慈善活動の要求 (82年7月16日)、貧困ゆえに道を踏み外した少女支援の議題について寄付を引き受けたこと (83年5月27日)、困窮者の推薦 (喜捨会計から1ドゥカーテン支出決定、84年6月7日) である²⁶。

また、ソリマンはロッジ「真の調和」への入会希望者の推薦人にもなっている。特筆すべきはボルンの加入にソリマンが関与しているということである。1781年11月14日のプロトコルには、「兄弟ソリマンによって持ち込まれた、皇帝にして国王の宮廷顧問官である兄弟・職人ボルンの、この由緒あるロッジへの加入・編入申請に基づき」²⁷ 投票が行われ、加入が認められたことが記載されている。すでに言及したように、ボルンが加入し、翌82年3月からロッジのマスターに就任することで、「真の調和」はウィーンのエリート・ロッジとしての名声を獲得したわけであるから、ソリマンはオーストリア・フリーメイソン史で大きな役割を果たしたことになる。

ロッジでのソリマンの役職

「真の調和」ロッジに加入した翌年の1782年3月9日、ボルンがロッジのマスターに選出されると、「恐ろしい兄弟には兄弟アンジェロ・ソリマンが、ロッジの全会一致の同意をえて大いに尊敬すべき大親方自身により任命された」²⁸。この役職はこの年の役員選挙以外には登場しないので、本来は幹部役員とはみなされていなかったのかもしれない。さらに、84年3月12日のロッジでは儀典長代理になっている。いずれも儀式と関係する役職である。

ソリマンが最初に就いた「恐ろしい兄弟」はどのような役割を担っているのか。『国際フリーメイソン事典』には以下のような説明が掲載されている。

イギリスのフリーメイソンリーには見られない。フランスのフリーメイソンリーの着想であり、準備の兄弟を恐ろしい姿に変装させ、準備の部屋の新参者のところへ送る。恐ろしい兄弟はフリーメイソンリーとはまったく異なるイメージ世界、つまり陰謀結社に必要なものである。新参者をぞっとさせなければならない！ ドイツのシステムではおそらく時折用いられ、今日ではすでに廃れている。ロマンス語圏のロッジでは間違った伝統価値としてなおも保持されている。²⁹

つまり「恐ろしい兄弟」は、新規参入者が最初に入れられる真っ暗な小部屋で、これから始まる参入儀礼の準備をさせる兄弟である。「真の調和」の『ロッジ本』*Logenbuch*でも第1位階の参入儀礼の手順に「恐ろしい兄弟」は繰り返し登場するが³⁰、「恐ろしい姿に変装」という記述は見当たらない。モリソンが引用している、アロイス・ブルーマウアー（Aloys Blumauer, 1755-1798）による1784年の聖ヨハネ祭のための詩「監督や役員の兄弟たちの健康を祈って」（*Gesundheit auf die Brüder Aufseher und Beamte. Am Johannisfeste 1784*）にも、「恐ろしい兄弟」についての描写がある。

われらの恐ろしい兄弟も
その役目にあっては真の悪魔祓いだ。
彼はわれらの神殿の敷居で
志願者をしばしば脅し
マスターが命じるならば、暗闇で
少なからぬ数の強固な精神の持ち主たちを追っ払ったのだ。³¹

「恐ろしい兄弟」は志願者に覚悟を求める。時には興味本位で入会を希望するような新参者を、脅して追い払ったのだろう。だが、ブルーマウアーの詩からは「脅し方」については伝わってこないし、『国際フリーメイソン事典』の記事のように、メイソンリーとは異質な世界の提示という役割も読み取ることはできない。なお、『ロッジ本』では「恐ろしい兄弟」の役割は暗い小部屋での準備作業を経て儀式に導くだけではなく、儀式で行われる象徴的な旅の最中にも「悩める者 [= 志願者] の恐怖を増すために、恐ろしい兄弟は、激しく飛び散る粉やほかの引火性の物質をろうそくに投げ込む」³²とされており、「恐ろしい兄弟」は「準備の兄弟」であると同時に儀式での試練の恐怖をより誇張する役割も果たしている。

さて、モリソンは「恐ろしい兄弟」が仮装して新参者に恐怖を与えるという役割を担っていたことを前提に（モリソンは先に引用したブルーマウアーの詩は恐怖を与えるソリマンを描いたと解釈している）、1782年の役員選出の際に、「役職を得た他の兄弟たちが選挙に出馬したのに対し」、ソリマンが「恐ろしい兄弟」の唯一の候補で「全会一致の支持を得た」ことに着目する³³。

モリソンは、この役職の創設が結社のメンバーたちにとって「黒い肌のアフリカ人というソリマンの境遇の直接の承認であり、それどころか賛辞」だったとするが、それはまた「彼の外見が引き起こす潜在的恐怖を認めていた」ためであるとする³⁴。いわば外見の差異を強調することで、彼は社会的エリートの集う空間に自分の場を、兄弟たちとの平等を獲得したのである。

すでに述べたように、「恐ろしい兄弟」が外見で新参者を脅したのかについては不確かである。さらに、ソリマンの「恐ろしい兄弟」選出が全会一致だったことについて、検討しておきたい。モリソンは全会一致を例外とみなしているが、同日に行われた役員選出で同様に選出された役職がある。プロトコルの「恐ろしい兄弟」のすぐ上に記載された儀典長(Zeremonienmeister)である。「儀典長には全会一致で兄弟ホッペが就任を認められ、しかるべき祝辞が述べられ、大いに尊敬すべき大親方からしかるべき栄誉章を受け取った」³⁵。さらに83年3月15日の役員選出でも、「儀典長には兄弟リーガー弟が全会一致で選ばれ、それも投票によらず、通常の祝辞による。彼はそれから大いに尊敬すべき大親方からしかるべき栄誉章を受け取った」³⁶とされ、84年3月12日には「儀典長。全会一致で兄弟シッターズベルク。代理は兄弟ソリマン」³⁷、85年5月25日には「[儀典長、喜捨管理係、司書の]3つ[の役職]はすべて全会一致で票を集めず」³⁸となっており、儀典長はそもそも投票の対象となっていなかったものと思われる。だとすれば、儀式全体を統括する儀典長が投票によらずに選出されるにもかかわらず、儀式の一部に関係する「恐ろしい兄弟」が選挙の対象となること自体不自然だと思われる。ソリマンは「大親方自身により任命された」のであり、ログジの新マスターとなったボルンの提案に異論が出なかったということではなかろうか。もちろん、ボルンをはじめ他の兄弟たちが、ソリマンの外見が潜在的に「恐怖」をもたらすことから、無意識にソリマンの適性を支持したという可能性は排除できないが。

ブルーマウアーの詩も示すように、少なくとも「真の調和」の参入儀礼では1784年6月までは「恐ろしい兄弟」が志願者の心の準備をつかさどっていた。ただし、ソリマン自身がいつまで「恐ろしい兄弟」を務めていたのか、恒常的に務めていたのかは不明であるし、外見が惹起する恐怖については裏付けがない。仮にソリマンが1785年まで「恐ろしい兄弟」の役割を担い続け、仮装して新参者に恐怖を与えていたとすれば、やはりフリーメイソンであったモーツァルトが1785年1月7日の自身の職人昇進儀礼のあとの徒弟の参入儀礼の際に、仮装したソリマンを直接見る機会があったかもしれない。

ソリマンとモノスタトス

モーツァルトの『魔笛』の登場人物に「悪い黒人」(der böse Mohr)として描かれるモノスタトス(Monostatos)がいる。パウル・ネットルは、マックス・パーカーがその著書でモノスタトスはソリマンから着想を得たと主張していることに対して、真っ向から否定している³⁹。モノスタトスの「愚かで、好色、嫌悪感を催させる性格」⁴⁰が誰からも尊敬されていたソリマンのそれとどんな共通性があるというのか、というわけである。それどころかネットルは、ソリマンがむしろ

ザラストロの性格を彷彿とさせ、さらに同じくモーツァルトの『後宮からの誘拐』*Die Entführung aus dem Serail* (1782) に登場するパシャ・セリムがソリマンの精神を想起させるとし、ソリマンが身に着けていたトルコ風の衣装とサーベルから、彼が常に「オリент風」とみなされていたことを注記している⁴¹。一方、エーファ・ゲジーネ・バウアーはシカネーダーの伝記の中で『魔笛』に関連してこのように述べている。

彼ら [= 秘儀を伝授された者たちや手掛かりを求める者たち] は、一方の側から他方へと鞍替えした黒人モノスタスでアンジェロ・ソリマンのことが言われているのかどうか推測できるのだ。彼は、フリーメイソン勅令まではボルンのロッジ「真の調和」にいたが、枢機卿ミガッツィの側に寝返ってからは、フリーメイソンたちの間では裏切り者とみなされているのだ。⁴²

バウアーによるこの記述はソリマン＝モノスタス説を念頭に置いたものだろう。なお、1785年のフリーメイソン勅令は、1780年代前半にヨーゼフ2世の啓蒙主義的改革を支えてきたメイソンたちと皇帝との協働関係を水を差すものとなった⁴³。ヨーゼフ2世はフリーメイソンリーを監督下に置くべく、ロッジの整理統合と国家による監視を推進しようとしたのである。勅令を受けてロッジ「真の調和」は「3羽の鷲」(Zu den drey Adlern), 「椰子」(Zum Palmbaum) とともに「真理」(Zur Wahrheit) に統合されたのであるが、ソリマンはひきつづき新ロッジに在籍している。彼がロッジを離れるのは1786年の10月から12月のあいだである。この時期、多くのメイソンがロッジを離れている。9月12日のロッジでは、「日々積み重なっていく俗事のために [ロッジの] ハンマーを返還しメイソンリーを永久に辞める」という内容のボルンのメモが紹介されている⁴⁴。プロトコルに記載された次のロッジは半年以上経った1787年4月3日で、ここではボルンを含め37名の退会者が挙げられている⁴⁵。ボルンの退会に連動する形で多くのメイソンがロッジ「真理」を離れたのである。ソリマンもその一人であった。「真理」ロッジのプロトコルにイルメン／シューラーによって付せられた解説によれば、この間に出された退会届には軒並みボルンに倣って「俗事」が理由として記載されており、この大量退会には「何らかの上からの圧力」が影響しているというのである⁴⁶。ソリマンはボルンと行動を共にしたといえよう。もっとも、ボルンのロッジ運営は「乱暴」という評価もあり⁴⁷、ボルンに反発したメイソンたちのソリマンに対する評価も厳しいものだった可能性は排除できない。

それではモーツァルトとソリマンの間に交友関係はあったのか。モーツァルトの文通記録にはソリマンへの言及は認められない。ネットルは、ロッジの記録にモーツァルトの名前がたびたびソリマンの名前の直後に記載されているとし、両者が一緒にロッジに入っていたと結論付けている⁴⁸。だが、そもそもモーツァルトが所属していたロッジはソリマンのロッジ「真の調和」ではなく、「慈善」(Zur Wohltätigkeit) である。確かに同ロッジは「真の調和」と関係が深く、モーツァ

ルト自身1785年1月7日「真の調和」において「由緒正しいロッジ『慈善』の要請で、通常の儀礼により第2位階に昇進」⁴⁹しているし、自身の職人昇進のロッジも含めて8回訪問している。とはいえ、ソリマンとモーツァルトが同席したロッジはそのうちの2回のみである。フリーメイソン勅令に伴うロッジ再編後についても、両者は別々のロッジに所属し、ソリマンが所属していた「真理」ロッジをモーツァルトが訪問した記録は見当たらない⁵⁰。さらにネットルはロッジの外での両者の交友は当然あったものと考えているが⁵¹、それを裏付ける資料に欠いている。

剥製にされたソリマンとフリーメイソン

ソリマンとフリーメイソンとのかかわりについて、モーニカ・フィルラの推測⁵²についても言及しておきたい。すでに述べたように、ソリマンは死後剥製にされたわけだが、彼女はそこにフリーメイソンの関与を推測する。ソリマンの剥製化は、直接には皇帝フランツ2世(Franz II., 神聖ローマ皇帝在位1792-1806年、オーストリア皇帝フランツ1世 Franz I., 在位1804-1835年)の意向が指摘されているが、フィルラが挙げる主導者は、アベ・シモン・エーベルレ(Abbé Simon Eberle), アウグスト・ファイト・エードラー・フォン・シッターズベルク(August Veith Edler von Schittersberg, 1751-1811), ヨーゼフ・バルト(Joseph Barth, 1747-1818)らである。フィルラはソリマンの遺体が素早く処理されたことから、遺体の利用は生前から決定されており、おそらくは友人たちに説得されて自由意志で献体したのだと推測する。そして、バルトやシッターズベルクがメイソンだったことを指摘しつつ、ソリマンの献体の持つ意味をロッジ「真の調和」の自然科学への態度と関連付ける⁵³。ソリマンのロッジは1785年に博物標本室を設置するように、自然科学に多大な関心を抱いていた。そして当時の自然科学の精神から、「ソリマンを剥製化ないし保存し、展示することは、啓蒙された自然科学の行為と見なされた」のだという⁵⁴。

もちろん、フィルラが推測するように、仮にフリーメイソンが献体を勧めたのだとしても、そして彼らの所属していたロッジが、当時の啓蒙主義の科学観に親和し、死者を医学の発展のために利用することを素朴に是としていたとしても、そのことがただちにフリーメイソンリーとソリマンを剥製にしたこととを結びつけるわけではない。フィルラ自身、「しかしこれがフリーメイソンリー独自の精神とどう折り合うのかは謎」⁵⁵としているように、安易にメイソンリーと関連付けるのではなく、啓蒙の時代の学問に内在した問題点として分析すべきだったのではなかろうか。

おわりに

アンジェロ・ソリマンは、啓蒙期のウィーンにおけるフリーメイソンリー研究に批判的視点を与えてくれる。ソリマンにとってロッジの中での平等は、モリソンが主張するように、異質な存在であるがゆえに享受できたものなのだろうか。ソリマンが「侯爵の黒人」だったがゆえにウィーンの上流社会から注目されたという側面は確かにあるだろう。だが、彼がリヒテンシュタイン家

の侍従となり、さらには世子の教育係を任せられるようになったのは、彼自身の資質によるところが大きいだろう。それでは「真の調和」ロッジの場合はどうだったのだろうか。モリソンの着目する「恐ろしい兄弟」が外見と結びつくのかどうかについては、本稿では未解決のままにせざるを得なかった。この点は今後の課題として、検討を継続していきたいと思う。その結果によっては、モリソンの主張を強化し、ロッジ内部の素朴な平等意識のはらむ矛盾が浮き彫りになるかもしれない。

また、直接証拠が提示されていないにもかかわらず言及されるモーツァルトとの関係はどうだろう。本稿ではモーツァルトとソリマンとの交友は裏付けられなかったし、ましてやモーツァルトのソリマンに対する態度がどのようなものであったのかは、先行研究をいくつか紹介するだけにとどまった。この点についても、もちろん今後の検討課題である。1780年代のウィーンのフリーメイソンリーについての研究では、ボルンの立場から「真の調和」のロッジ運営が肯定的に取り上げられることが多い。だが、仮にソリマンが裏切り者とみなされていたらどうだろうか。これは1785年のフリーメイソン勅令及びその対応への評価とかかわってくるだろう。また、モーツァルトがソリマンを肯定的に捉えていたとしたらどうであろうか。彼とシカネーダーはなぜモノスタトスを生み出したのだろうか。アンジェロ・ソリマンへの関心は、啓蒙期のウィーンのフリーメイソンリーの諸問題を検討するうえで、さまざまな糸口を提供してくれるのである。

註

¹ Karoline Pichler: *Angelo Soliman*. 1807. In: *Sämtliche Werke von Caroline Pichler, geboren von Greiner*. Dreyzehnter Theil. Wien 1814, S. 217-233, hier S. 228.

² Monika Firla: „Segen, Segen, Segen auf Dich, guter Mensch!“ *Angelo Soliman und seine Freunde Graf Franz Moritz von Lacy, Ignaz von Born, Johann Anton Mertens und Ferenc Kazinczy*. 2., durchges. Auflage mit vier Abbildungen. Wien 2003.

³ ソリマンの生涯については、以下の文献を参考にした。Pichler: *Angelo Soliman*. 1807; Constantin von Wurzbach: *Biographisches Lexikon des Kaiserthums Oesterreich*. 35. Theil. Wien 1877, S. 248-251; Philipp Blom, Wolfgang Kos (Hgg.): *Angelo Soliman. Ein Afrikaner in Wien*. Wien 2001; Monika Firla: „Segen, Segen, Segen auf Dich, guter Mensch!“

⁴ ビヒラーは Magni famori としている。Vgl. Pichler, a.a.O., S. 218. 本来の名前は Mmadi Make で領主の息子とされるが、ソリマンはのちに歴史上の人物でもある Wándela-Prinz Mmadhi Make を自称したという。Firla, „Segen, Segen, Segen auf Dich, guter Mensch!“, S. 51. また、フィリップ・ブロームは今日のニジェールとチャドとの国境地帯にあったカネム・ボルヌ帝国のカヌリ族の下位グループ Magni Famori と結びつく可能性も指摘している。Vgl. Philipp Blom: *Von Mmadi Make zu Angelo Sollima — Eine Spurensuche*. In: Philipp Blom, Wolfgang Kos (Hgg.): *Angelo Soliman. Ein Afrikaner in Wien*. Wien 2001, S. 67-79, hier S. 68.

⁵ ブロームはメッシーナの奴隷が洗礼の際に主人の姓を与えられていたということから、ソリマンの所有者がソリマ伯爵 (Graf Sollima) である可能性を指摘している。ソリマ伯爵がソリマンを譲り受けたロコヴィッツ侯爵と密接な関係にあったこともこの推測を強化している。Vgl. ebd., S. 73f.

⁶ Pichler, a.a.O., S. 224.

⁷ Blom, a.a.O., S. 74f.

- ⁸ Vgl. Rüdiger Wolf: *Fürsten und Freimaurer — Angelo Soliman als Diener dreier Herren*. In: Philipp Blom u. Wolfgang Kos (Hgg.), *Angelo Soliman. Ein Afrikaner in Wien*. Wien 2001, S. 97–105, hier S. 97. 以下の侯爵の経歴はヴォルフによる。
- ⁹ Pichler, a.a.O., S. 226.
- ¹⁰ Vgl. Blom, a.a.O., S. 76.
- ¹¹ Vgl. Rüdiger Wolf, a.a.O., 98.
- ¹² Pichler, a.a.O., S. 227.
- ¹³ Vgl. Firla, „*Segen, Segen, Segen auf Dich, guter Mensch!*“, S. 52.
- ¹⁴ Vgl. ebd., S. 53.
- ¹⁵ Hans-Josef Irmen (Hrsg.): *Die Protokolle der Wiener Freimaurerloge „Zur wahren Eintracht“ (1781–1785)*. Herausgegeben in Zusammenarbeit mit Frauke Heß und Heinz Schuler. Frankfurt am Main 1994, S. 44.
- ¹⁶ Vgl. Rüdiger Wolf, a.a.O., S. 101. ヴォルフによれば、マグダレーネ・フォン・シュテグナール男爵夫人 (Magdalene Freiin von Stegnern) は、1772年12月18日のソリマンの娘ヨーゼファの洗礼の際に代父ヨーゼフ・フォン・ベンダー男爵 (Joseph Freiherr von Bender) の代理を務めたという。
- ¹⁷ Irmen, a.a.O., S. 47.
- ¹⁸ Vgl. Rüdiger Wolf, a.a.O., S. 103.
- ¹⁹ Vgl. Heather Morrison: *Dressing Angelo Soliman*. In: *Eighteenth-Century Studies*, vol. 44, no. 3 (2011), S. 372.
- ²⁰ Vgl. Hans Wagner [Herausgeber: Museumsverein Schloß Rosenau Österreichisches Freimaurer-museum]: *Freimaurerei um Joseph II. Die Loge Zur wahren Eintracht*. Wien 1980, S. 25.
- ²¹ イルメンによれば、「ツィンネンドルフ・システムは […]、啓蒙主義をスローガンに掲げるロッジをロッジ『戴冠した希望』や『聖ヨーゼフ』 (Zum hl. Joseph) に併設することで、厳守派に対してより大きな勢力をもたねばなかった」、つまり、「真の調和」設置の目的はツィンネンドルフ・システム拡大にあった。しかし、1781年秋には本来の意図とは異なり、「ウィーンにとって全く新しい、イルミナーティの主義に忠実な方向を促進する可能性」が浮かび上がり、同時にウィーンにはなかった学術アカデミーを実現できると思われ、ボルンは好機と捉えたのだという。Vgl. Irmen, a.a.O., S. 8ff.
- ²² 創設メンバーの経歴については以下を参照した。Günter K. Kodek: *Brüder, reicht die Hand zum Bunde. Die Mitglieder der Wiener Freimaurer-Logen 1742–1848*. Wien 2011.
- ²³ Vgl. Irmen, a.a.O., S. 13.
- ²⁴ Vgl. ebd.
- ²⁵ 4年半の間に166回出席 (うち1回は訪問者として記載)。
- ²⁶ Vgl. Irmen, a.a.O., S. 84, 143, 210.
- ²⁷ Ebd., S. 54.
- ²⁸ Ebd., S. 66.
- ²⁹ Eugen Lennhoff, Oskar Posner: *Internationales Freimaurerlexikon*. Unveränderter Nachdruck der Ausgabe 1932. Wien, München 1973, Sp. 546.
- ³⁰ *Das Logenbuch der Loge „Zur wahren Eintracht“*. Hrsg. von Ernst Lorenzi. Quellen zur freimaurerischen Geschichtsforschung. Heft Nr. 2. Sommer 1979. Quatuor Coronati Or. Wien, S. 66ff.
- ³¹ *Journal für Freymaurer*. Dritten Jahrgangs Zweytes Vierteljahr (5786 [=1786]), S. 178.
- ³² *Das Logenbuch*, S. 77.
- ³³ Morrison, a.a.O., S. 372.
- ³⁴ Ebd., S. 372f.
- ³⁵ Irmen, a.a.O., S. 66.
- ³⁶ Ebd., S. 126.

- ³⁷ Ebd., S. 193.
- ³⁸ Ebd., S. 280.
- ³⁹ Vgl. Paul Netti: *Angelo Soliman — Friend of Mozart*. In: *Phylon* vol. 7, No. 1 (1946), S. 45. なお、ネットルの挙げている Max Parker: *Around and About the Magic Flute* の書誌情報は確認できなかった。
- ⁴⁰ Netti, ebd.
- ⁴¹ Vgl., ebd.
- ⁴² Eva Gesine Baur: *Emanuel Schikaneder. Der Mann für Mozart*. München 2012, S. 215.
- ⁴³ フリーメイソン勅令への反応については、上村敏郎「啓蒙専制期ハプスブルク君主国における批判的公共圏の成立—フリーメイソン勅令をめぐるパンフレット議論に基づいて—」, 『クアドランテ』 No. 18 (2016), 145-155 頁を参照のこと。
- ⁴⁴ Hans-Josef Irmen u. Heinz Schuler (Hgg.): *Die Wiener Freimaurerlogen 1786-1793. Die Protokolle der Loge „Zur Wahrheit“ (1785-1787) und die Mitgliederverzeichnisse der übrigen Wiener Logen (1786-1793)*. Zülrich 1998, S. 50.
- ⁴⁵ Vgl. ebd., S. 52.
- ⁴⁶ Vgl. Netti, a.a.O., S. 14.
- ⁴⁷ Adolf Deutsch (Loge Prometheus, Wien): *Ignaz von Born. 1749-1791*. Zeulendorf, O. J., S. 54. なおドイツ語は、フリーメイソン勅令についてのパンフレットでボルン批判をしたクラッター (Franz Kratter, 1758-1830) に対するボルンの不当な振る舞いを痛烈に批判している。Vgl. ebd.
- ⁴⁸ Vgl. Netti, a.a.O., S. 14. なお、ネットルの記述からは、どのログの記録を念頭に置いているのか不明である。
- ⁴⁹ Vgl. Irmen, a.a.O., S. 245.
- ⁵⁰ Vgl. Irmen u. Schuler, *Die Wiener Freimaurerlogen 1786-1793*. ソリマンがモーツァルトのログを訪問した可能性も排除できないが、この点については調査できなかった。
- ⁵¹ Vgl. Netti, a.a.O., S. 14.
- ⁵² Monika Firla: *Bemerkungen zu zwei kontroversen Punkten in der Biographie Angelo Solimans (Um 1721-1796)*. In: Gerhard Höpp (Hrsg.): *Fremde Erfahrungen. Asiaten und Afrikaner in Deutschland, Österreich und in der Schweiz bis 1945*. Berlin 1996, S. 25-39.
- ⁵³ フィルラはバーデンのロレット博物館のカatalogでも「『兄弟たち』のあいだでの遺言？」という表題をつけ、この点に言及している。Vgl. Monika Firla: *Angelo Soliman — Ein Wiener Afrikaner im 18. Jahrhundert*. Mit einem Beitrag von Rudolf Maurer. Baden 2004, S. 48. この「フリーメイソン陰謀論」に対し、リュウディガー・ヴォルフは反発している。彼はエーベルレがフリーメイソンでないこと、遺産相続で問題となっている人物フォイト博士なる人物をシッタースベルクの名前の一部「ファイト」と混同している点などを挙げ、事実誤認によりフリーメイソンと関連付けていると切り捨てている。Vgl. Rüdiger Wolf, a.a.O., S. 105.
- ⁵⁴ Vgl. Firla, *Bemerkungen*, S. 32.
- ⁵⁵ Ebd.